

Region Vivir

レジオン・ヴィヴィ



社会福祉法人
県央福祉会

Region Vivir は、スペイン語で地域で暮らすという意味です。
これからは障がいがあっても地域で豊かに暮らす時代だと思います。

発行者 社会福祉法人県央福祉会
発行所 神奈川県大和市柳橋 5-3-1
URL <https://www.tomoni.or.jp/>
発行責任者 柴田 琢
編集責任者 小林 裕一郎
印刷 ワークス桜舎
デザイン 荒 奈津美

No. **47** 2025
11.15

「秋の夜長」

社会福祉法人 県央福祉会 理事長 柴田 琢

「しかく」と言えば？

皆さんは「しかく」と聞いて何を思い出すでしょうか？調べてみると、【四角、刺客、資格、視覚、死角】…、他にも色々ありますが大体この5つが「しかく」ベスト5となるようです。時代が時代なら「刺客」が最も身近になるかもしれませんが、現在では「資格」が最初に思い浮かぶのではないのでしょうか。

資格には国家資格から公的資格、民間資格など様々な資格が存在し、国家資格だけでも1,200種類以上、民間資格も入れると3,000種類は優に超えると言われています。そして99%の人が何らかの資格を有し、4人に一人は10個以上保有しているという統計結果も出ています。その中で福祉に関係のある資格や認定もたくさんあり、細かなものまで入れればかなりの数になります。

社会福祉主事、サービス管理責任者等、作業療法士、理学療法士、言語聴覚士、義肢装具士、臨床心理士、児童福祉司、福祉住環境コーディネーター、介護職員初任者研修、介護支援専門員、認知症介護士、レクリエーション介護士と挙げればきりがなく、分野や専門によって極める道は違い資格も多様です。

その中でも国家資格に位置付けられている資格が、福祉の三大国家資格と言われる社会福祉士、介護福祉士、精神保健福祉士です。取得は難しく、特に社会人となると、仕事をしながらの勉強は至難の業です。

そんな国家資格ですが、県央福祉会は資格取得を推奨しており、毎年多くの職員が資格取得にチャレンジをしています。そして、2025年6月30日現在では、社会福祉士198人、介護福祉士339人、精神保健福祉士67人と、多くの資格取得者が在籍しています。付け加えるなら保育士333名、看護師68名など、専門的知識を身に着けた精鋭が、日々業務に当たっています。

資格は取得して終わりではなく、そこからがスタートになります。私の名前の由来でもあります「切磋琢磨」の四字熟語のように、職員が日々努力を重ね、自分を磨き成長できる法人であり続けたいと願っています。それが県央福祉会であり、最終的には利用される方の安心や満足につながってくると信じています。

皆さんも秋の夜長、何か資格にチャレンジしてみたいはいかがでしょうか。

新しい発見があるかもしれません。

01 「秋の夜長」

(理事長 柴田 琢)

03 戦後80年 (常務理事 松本 孝治)

04 これからの国際貢献委員会 (執行役員 山崎 顕)

05 トピックス① トランス・フィットネス事業部の紹介

06 レポート 県央福祉会 部会の取り組み

08 事業所探訪 アゼリアうみ風

10 トピックス② 児童から成人まで長期にかかわる支援

12 2024年度決算報告

14 助成金受給 寄贈 HPリニューアル 編集後記



ハードルは低く効果が高い「あるく」

人の体は正直です。必要以上に食べても食べなくても、そして偏った食事でも変調をきたします。それでも若いうちはある程度カバーできますが、年齢を重ねると段々とうちにもなくなります。健康診断を受けても、今まで何もない項目に異常が付くなど、日々の健康管理はとても重要になってきます。

県央福社会でも健康経営にシフトをチェンジしており、健康で働くことに重点を置いています。その中でよく耳にする言葉が、「運動不足」です。スポーツの趣味がある方は、野球やサッカー、バドミントン、卓球など、休みの日に汗を流す、またワンダーフォーゲルやスキー、サーフィンなど山や海で心や体をリフレッシュする人もいます。しかし、これらは多くの方にとってハードルが高く、比較的挑戦しやすいものとしてはランニングやプールではないでしょうか。しかしそれでも、忙しい毎日では継続は難しく、気が付けば止めてしまっているのではと感じています。

では、何なら継続して体を動かすことができるのか、それは「あるく」こと、外に出ることだと考えています。仕事をしていても、朝の散歩や夜の散歩、もっと言えば、出勤時・帰宅時の歩行など、意識をすれば、いつでも、どこでも、誰とでもできる、それが「あるく」ことではないでしょうか。車いすの方は自走式にする、もしくは電動であっても、介助者の方に押してもらっても、外に出ることは健康への第一歩だと感じています。

私自身も普段から意識をして外を歩くよう心掛けています。先日は、災害時におけるBCP※の観点から、法人本部を出発し、自宅までの約12キロを歩いて帰りました。一駅ごとにタイムを計り、小田急江ノ島線の一駅は平均徒歩20分でした。トータルでは早歩きをして約2万歩、1時間50分ほどで帰宅できましたが、普段は車で通るだけのため気付かない発見や、交通量、道幅、川や勾配などを歩く目線で感じることができました。

職員の中には東海道を何回かに分け歩ききり、

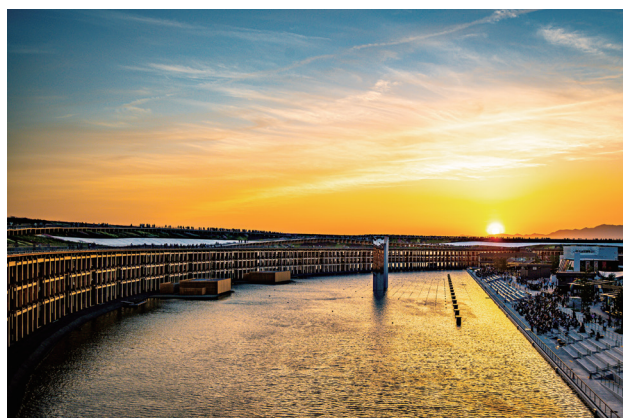
現在は中山道に挑戦している者もあり、歩くことが健康だけでなく目的を持った「趣味」になることも教えられました。

こんな私ですが、意識して外を歩くようになったきっかけは、仕事の大半が事務ワークとなり、運動不足を感じたこと、息子に運動をさせたく一緒に歩くようになったこと、そして元気いっぱいな母親が、今でも毎日1万歩以上は歩いていることです。

現代では、歩くことは良いこととされ、ウォーキングの効果（高血圧の改善・心肺機能の強化・骨の強化・動脈硬化や肝機能の改善・腰痛の改善・リラックス効果など）を謳う記事も多く目にします。その一方で、「歩きすぎはダメ」、「1日1万歩以上歩いてはいけない」などの情報もSNS上で飛び交っています。ただ、私が身を持って言えることは、意識をして歩くようになった結果、毎年行っている健康診断の数値は改善されました。人それぞれ個人差があると思いますが、私は続けていきたいと実感しています。

皆さんも秋の夜長、まずはちょっと散歩でもしてみませんか。

※BCP（事業継続計画）：企業が自然災害などの緊急事態に遭遇した場合において、事業の継続や早期復旧を可能とするために、平常時に行うべき活動や緊急時における事業継続のための方法、手段などを取り決めておく計画。



撮影場所：「大阪・関西万博」（この日は2万5千歩あるきました）

戦後 80 年

社会福祉法人 県央福祉会 常務理事 松本 孝治

いつまでも忘れずに
後世に残すために
戦争によって
世界中で悲しい思いをする
子どもたちや人々がいなくなることを祈ります

「被曝 80 年企画展 ヒロシマ 1945」(東京都写真美術館)より

昭和 100 年、戦後 80 年。そして県央福祉会の前身である「子どもの生活相談室」開設から 50 年。さらに社会福祉基礎構造改革から 25 年、社会福祉法人制度改革から 10 年と時を経て、社会は複雑化・多様化し大きな節目の転換期に差しかかっています。世界を見渡せば、アメリカを筆頭に、自国主義・自国ファーストが強化され、力によるごり押しがまかり通っています。ロシアのウクライナ侵攻、中東の危機、長年の対立に加えて、核兵器を巡る危うさもはらんでいます。

昨年、「核兵器が二度と使用されてはならない」と訴え続けてきた被爆者の取り組みと覚悟が評価され、日本原水爆被害者団体協議会(日本被団協)がノーベル平和賞を受賞したことを考えると、唯一の戦争被爆国として日本の果たすべき役割は大きいと感じています。

日本では、少子高齢化、人口の減少、物価の高騰、労働人口減少、さらに地域社会の希薄さからの孤立・孤独などの問題が顕在化しています。今年、2025 年は団塊の世代がすべて後期高齢者になり、医療・介護などの需要はさらに大きなものとなっていきます。さらに、2040 年には、65 歳以上の高齢者が全人口の 34.8%に達し超超高齢社会に突入すると言われています。逆に 15 歳～64 歳の生産年齢人口は、2025 年時の推計と比較すると 1,096 万人も減少するとの予測が立っています。こうした人口構成の変化により、医療・介護・年金などの社会保障やインフラの維持が困難となるほか、労働力不足から経済が縮小するなどの問題が出てくると予想されています。

現状でも恒常的、慢性的な人材不足は、私たち

従事者の安心を脅かすだけでなく、主体となる利用される方々へのサービスの提供も不足が懸念されています。さらに、複雑化する制度が業務の重荷となり、人間関係の均衡も崩れ、よりストレスフルな環境が助長されることになります。

人員配置や財務について、どんどん無理を強いられるようなことが今の社会の中で進行しつつあります。つまり、現場では利用される方々の尊厳を守るためにさまざまな業務をこなしていかなければならないのに、状況はそれに真向から逆行する事態が進展しているということです。

県央福祉会が掲げる「明るく・楽しく・元気に」を実践し、働きやすい魅力ある職場を作ってこそ、次の時代を担う人たちが集う、揺るがない組織を築いていくことができるのです。

社会福祉法人の制度改革では、ガバナンスの強化・透明性の向上・財務規律の強化などの取り組みがなされています。これらの取り組みを通じて、これからの社会福祉法人が直面するさまざまな課題と真摯に向き合い、次の時代に向けて知恵を傾けていくことが最も大切だと思います。

そして、たとえ時代が流れても、変わってはいけない、守り抜くべきものがあります。

「戦争をしてはいけない」

厳しい現実を前にしてもなお、「結局、ものをいうのは力」などと言って無関心にならずに、社会をともに育て、戦争のない平和な世の中をつくって行くこと——。それが私たちの次の世代に伝えなければならない責務であると思います。

これからの国際貢献委員会

社会福祉法人 県央福祉会 執行役員 山崎 顕

新型コロナウイルスの流行が落ち着き、世界では再び人々の往来が活発になってきました。日本には観光やビジネスを目的に、海外から多くの方々が訪れるようになりました。また、日本から海外への渡航も以前より容易になり、世界との距離がぐっと近づいたように感じられます。

こうした国際化の流れの中で、コロナ禍以前の県央福祉会では、国際貢献活動の一環として、ベトナム、フィリピン、カンボジアなどへ職員が赴き、児童養護施設等でのボランティア活動や現地の施設職員との交流を重ねてきました。さらに、イベント参加や現地の商品販売などを通じて、地域とのつながりを深めてきました。これらの取り組みは、単なる支援にとどまらず、文化や価値観の違いを理解し、共に生きる社会の実現に向けた第一歩でもありました。

ベトナムでの活動では、NPO 法人「手を洗おう会」と協力し、衛生教育や文化活動を通じた支援を行ってきました。「手を洗おう会」は 2002 年に設立され、セネガル、タイ、ベトナムを拠点に「手洗い習慣の普及」を中心とした衛生教育に取り組んでいます。さらに、子どもたちの絵画展や図書支援（BIBLO プロジェクト）、さをり織りの導入など、教育と文化を通じた社会参加支援も行っています。

こうした多角的な活動を通じて、「手を洗おう会」との連携のもと、国際貢献委員会では新たに西アフリカのセネガルで国際貢献活動を展開します。セネガルは政治的に安定しており、治安も比較的良好な国で、日本との関係も深いことで知られています。若い世代が多く、教育と人材育成が急務ですが、植民地時代の影響で公用語はフランス語であり、日常的に使われる民族語を学校で学ぶ機会が少ないため、書き方を知らない人が多く、識字率の低さが深刻な課題です。

この課題に対して、ベトナムでの支援活動で得た経験と知見を活かしながら、セネガルにおいても「手を洗おう会」と連携し、衛生教育と文化支援の両面から取り組みを進めていく予定

です。現地の人々と協力しながら、誰もが安心して暮らせる共生社会の実現を目指していきます。

また、国際研修として、2018 年にはイタリアのトリエステに赴き、精神科病院を全廃した地域精神保健の取り組みを学び、2019 年には米国ノースカロライナにある TEACCH センターにて、本場の TEACCH プログラムの実践を体験することができ、大変貴重な経験となりました。

こうした国際研修や交流を通じて、県央福祉会の職員一人ひとりが世界の福祉の現場から学びを得て、それを地域に還元していくことが、今後ますます重要になっていくと感じています。国際研修や国際交流に関して、現場に根ざした実践的な学びや交流ができるよう、新たな企画を練っています。国際的な視点を持ち、異なる文化や価値観を理解しながら、地域の中で実践を重ねていくことが、福祉の質を高める大きな力になると確信しています。

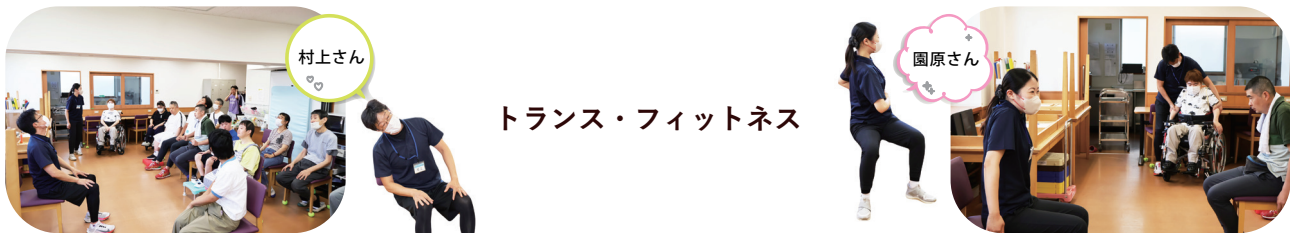
先日、国立競技場で開催された世界陸上を観戦した際、海外の方々と気軽にコミュニケーションが取れなかった自分に気づきました。今後海外の方と接する機会も増え、多様性がさらに進んでいくことが予想されます。県央福祉会の職員が言葉だけでなく、文化的な理解を深め、誰もが安心して関われる福祉の現場を築いていけるよう、グローバルな視点で物事を捉えられる人材を育成していきたいと考えています。



左から、山崎執行役員、柴田理事長、NPO 法人手を洗おう会セネガル支部 支部長ラミン・チャム氏、国際貢献プロジェクト高橋委員長、道下副委員長

トピックス① トランス・フィットネス事業部の紹介

トランス・フィットネス事業部は、2016 年 9 月に法人内で立ち上げた運動をメインとした事業部です。2 名でスタートし、2020 年からはフィットネスとミュージックの 2 分野に分かれて活動をしています。フィットネスを担当している村上さん・園原さんとミュージックを担当している福田さん・熊野御堂（くまのみどう）さんにお話を聞きました。



トランス・フィットネス

①どのような方を対象に行っていますか？

外部（大和市・自治会・他法人）と内部（日中活動系事業所、グループホームや各部会からの依頼）を中心に活動をしています。多い月には 35 プログラムを 2 名のスタッフで行っています。

②トランス・フィットネスのやりがいは何ですか？

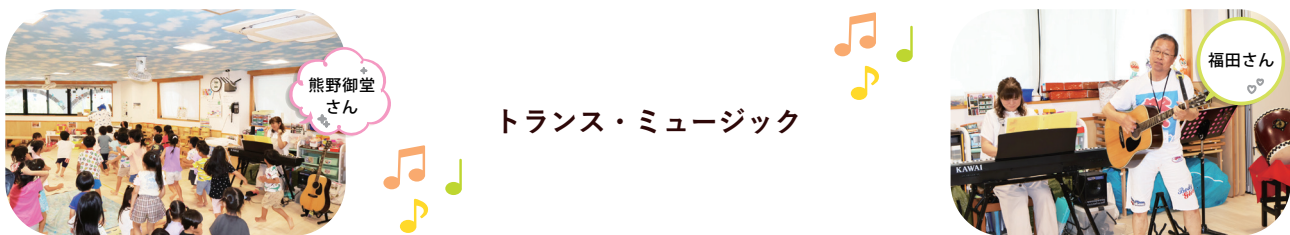
村上さん：職員にとって新しい発見が見つけれられた時や、みんなが楽しみにしてくれていること。

園原さん：色々な方と出会い、回数をこなすことで利用者さんが内容や動きを理解し楽しみながら参加をしてくれること、利用者さんに貢献が出来ていること。

③トランス・フィットネスをやってみて楽しかったことや大変なことは何ですか？

村上さん：利用者さんの年齢や体力差、興味関心に違いがある中で、参加される方々に合わせて運動量を調節し、楽しみながら体を動かしていただくことに難しさを感じます。

園原さん：支援員として県央福祉会に入職し、色々と経験をさせていただく中で、今は支援と同じく、一人ひとりの健康を考えてプログラムを行うことが楽しいです。



トランス・ミュージック

①どのような方を対象として行っていますか？

認知症の方のグループホームや高齢者のデイサービス・障がい者施設、子どもの療育、保育園や子育て支援施設で行っています。平均的に 1 か月 27 プログラムを行っています。

②トランス・ミュージックで大切にしていることはどんなことですか？

利用者さんが音楽を通して癒され、自己解放・自己表現が出来るようにすることです。

③トランス・ミュージックのやりがいはどんなことですか？

福田さん：やっていて自身が楽しく、参加をしている方も笑顔になっていることです。

熊野御堂さん：福田さんと同じです。福田さんのアシストを通して自身も楽しんでいます。

（取材・執筆：広報委員 吉田）

レポート 県央福祉会 部会の取り組み

県央福祉会では幅広い事業を展開しており、それぞれ求められる専門性や課題が異なります。当法人では部門ごとに計6つの部会を設置し、各部会のメンバーは日々切磋琢磨しています。



部会長
八十島 清隆

生活介護部会

今年度の生活介護部会では、現場からのボトムアップを大切にしています。現場職員の声を活かしていこうと、各事業所から職員に集まってもらい、現場部会を構成し、事業所を横断した共通プログラムの展開や研修会の企画・実践をして一定程度の成果を上げてきました。

今年度は現場部会の構成を変更し、各グループから法人の核として期待される人材を推薦し、部会が抱える課題の分析・検証を行い、実践報告会での発表を目指しています。事業所の経営上の課題や地域ニーズに向き合い、課題解決をする意識を持ってもらい、将来的に法人が新規の事業展開をするときに、地域課題に即した事業などを提案できる取り組みをしていきます。今必要な事業は何か自分で考え、地域ニーズを自分で感じ、地域社会に貢献できる事業を実践する。福祉職として『伝える力』『見据える力』『関わる力』『共感する力』を身につけた人材を輩出したいと考えています。



部会長
鈴木 和人

就労部会

就労部会では法人の「明るく、楽しく、元気に」をスローガンに、利用者さんと共に生産活動に取り組みながら、就労支援の専門性と生産・販売のノウハウ向上を目指しています。2025年度は、工賃目標(B型30,000円、生活介護5,000円)達成に向けて、商品の見直しや販路の拡大、経費削減による効率的な商品作りに注力しています。「市場の動きに主体的に参加する」ことを意識し、トレンドな商品づくりや職員・利用者さんが楽しめる販売活動を推進しています。就労支援については職場体験などを通じ、就労に必要な力の把握と支援力の向上を図っています。

課題としては、障がいのある方の「働く」ことを支える専門性の継承や、福祉分野外との連携・理解促進があげられます。今後は職員の育成やネットワークづくりを進めながら、地域に根ざした多様な「働く」の形を支える活動を展開していきます。



部会長
大越 由喜彦

グループホーム部会

グループホーム部会は、共同生活援助事業が40事業所で構成されています。共同生活援助事業では、486人の利用者さんの日常生活及び地域生活を支えています。本年度からも4つの地区でグループ長を置き、それぞれスーパーバイズする体制を敷いています。

グループホーム全体の課題は、たくさんありますが一番大きいものが、担い手の人材不足です。大手企業では初任給を大幅に上げて何とか人の確保をしていくという報道がありますが、障がい福祉分野は収入が公定価格であるため、それができず、職場環境の改善ややりがいの部分で勝負するしかありません。また、同性介護の観点から男性非常勤職員の雇用は必須ですが、至難の業です。常勤職員で男性をたくさん雇用できるような報酬体系にはなっていないからです。そのような状況下ですので、現有戦力である職員が長く働けるようこれからも努力していきます。ご家族の皆様や関係者の皆様、厳しいご意見は管理者へ、そして温かいお言葉は現場の職員にいただけると幸いです。



部会長
山崎 颯

介護医療相談部会

介護部門は、高齢化や多様なニーズに応えるために、地域包括支援センター、デイサービス、グループホーム、居宅介護、訪問介護を運営しています。地域のつながりを大切に、高齢者が安心して生活できる環境を支えています。また、介護予防活動も展開し、利用者様が自立した生活を続けられるよう支援しています。医療部門は、大和さくらクリニック、あおば（医療型特定短期入所）を運営。コロナ禍ではワクチン接種等、重要な役割を果たしました。現在もインフルエンザワクチン接種等、欠かせない存在です。また、通所施設の看護師は、グループホームにも派遣し、利用者様の健康管理、職員への医療的な指導を行っています。相談部門は、計画作成やサービス調整だけでなく、利用者様やご家族が安心して地域社会で生活できるよう、多岐にわたる役割を担っています。サービス資源が不足し、サービス調整が困難な場面もありますが、利用者様一人ひとりの多様なニーズに対応し、質の高い生活の実現に取り組んでいます。

介護医療相談部会共通の課題は、人材不足、専門職の確保です。課題解決には、多職種連携やICTの導入等、業務の改善が必要だと考えられます。法人のスケールメリットを活かし、職場環境改善と人材育成に全力で取り組み、利用者様の笑顔と安心を支える地域共生社会の実現を目指します。



部会長
佐久間 葉子

保育部会

保育部会は全10園となりました。一番古い保育園は石上保育園（藤沢市）開園16年目、一番新しい保育園は緑ヶ丘もえぎ保育園（座間市）開園3年目です。

2025年度、法人は「個」を大切にしています。保育部会も各園を大切に、しっかり職員同士向き合い、選ばれる保育園を目指しています。7月初旬、「インクルーシブ保育」をどのように構築しているか、主任保育士がチームで園を回り共有しています。また7月11日には、保育部会主催の「新人職員懇親会」を行いました（写真）。この日はトランスフィットネス事業部による腰痛予防体操、こどもの城の見学、そして会食を楽しみ、12名が同期の絆を深めました。

乳幼児期の保育に関わる仕事は崇高です。保育園（こども園）は今や社会を支えるインフラだと感じています。子どもたちのやる気と得意をさらに伸ばしていきます！



部会長
高木 悦子

療育部会

療育部会は、10拠点ある児童療育の事業所で構成されています。定例部会で管理者が集まり情報共有をしています。昨年は大きな報酬改定があったため、各事業所が基本単価や加算をどう上げていくかについて、制度と絡めた話し合いを多く設けました。また、虐待防止やBCPなどの研修報告や取り組みについても情報交換しています。さらに、年数回の職員研修と年1回の保護者向け研修を年間計画を立てて実施。近年は部会の事業所数も増え、エリアが県内全域に広がったため、職員同士が顔を合わせる機会が少なくなりました。それでも、入職1～2年目職員の対面研修を実施したり、年1回は全体の集合研修を行うなど、できるだけ職員らが外向きに視野を広げる機会を作っています。それによって、個々の職員が日々提供する療育内容を充実させ、本人支援、家族支援の質の向上につながることを期待しています。（代筆：療育グループ長 南湖 浩一郎）

事業所探訪 アゼリアうみ風

<事業所概要>

就労継続支援 B 型定員 20 名、生活介護定員 10 名の多機能事業所です。製菓だけではなく、軽作業も行っています。事業所で有名なのが、プリンとドーナツですが、今年の夏にリニューアルされました。リニューアルに至った経緯を仕入れ先の方も含めてお話を伺いました。

<リニューアルに至った経緯>

令和 7 年 7 月 7 日にオープンした「道の駅湘南ちがさき」に出店が決まった矢先、牛乳を仕入れていた牧場が突然倒産。急いで仕入れ先を探していたところ茅ヶ崎市内にある「かきざわ牧場」を見つけました。直接、交渉に行きプレンティーズの長谷川社長のご協力もあり「湘南ちがさき MILK」を使用できることになりました。卵も茅ヶ崎産にしたいと考え、卵の仕入れ先も変更しました。

<火ノ鳥養鶏農園>

“もっと多くの人に火の鳥たまごを知ってほしい” そう語ってくれたのは火ノ鳥養鶏農園を営む清水さんご夫妻。もともとは平塚で農業を始めていましたが、地元の茅ヶ崎でもできないかと考え、知り合いから土地を借り始めたのがきっかけです。

“昔から好きだったニワトリを飼育したい” そう思い 12 年前から始めました。こだわりは放し飼いと平飼いをしているところです。ストレスフリーな状況を作ることによって卵を産みやすい環境を整えています。また、黄身と白身のバランスをうまく保てるよう自家製発酵飼料を使用しています。

現在は 300 羽のニワトリを飼育し、5 種類の卵（ボリスブラウン、さくら、アローカナの卵、名古屋コーチン、うこっけい）を販売しています。飲食店等にも卸していますが直売がメインとなっています。



<商品紹介>

牛乳と卵の仕入れ先を変更し、完成したのが「無添加ちがさき三層プリン」と「ちがさきドーナツ」。作り方は今までと変更していませんが茅産茅消にこだわり抜いた品となっています。ドーナツは前からあった2種（チョコ、ミルク）に加えて、ホワイトチョコのドーナツも加わり、商品名もすべてリニューアルしました。現在は道の駅湘南ちがさきでの販売をメインとし、連日完売となっています。



<今後の展望>

期間限定でコーヒーショップ「XAYMACA（ザイマカ）」とコラボ商品を販売する予定です。店主の堀米さんは“日本一居心地の良いカフェ”を目指し、始めたと言います。プリンやドーナツとのコラボについては「面白いものができるかな?」と思い、二つ返事で承諾してくれました。一体どんな商品に仕上がるのか…これからも注目です!

コーヒーショップ
「XAYMACA」



<最後に>

突然訪れた仕入れ先の変更でしたが、約3か月で形となり今や売れ残る日はないくらいの最高の品に仕上がっています。無添加ちがさき三層プリンは、神奈川新聞やタウンニュース茅ヶ崎寒川版にも売り切れ続出商品として掲載されるほど人気商品となっています。コラボ商品も楽しみです、ぜひ一度お買い求めいただけたらと思います。

(取材・執筆：広報委員 守家)



事業所データ

住所：〒253-0017

神奈川県茅ヶ崎市松林1丁目17-17

電話：0467-53-8122

トピックス② 児童から成人まで長期にかかわる支援 ～支援を通して見えてきたこと～

今回は児童から成人にかけ県央福祉会が携わっている1人のご利用者（Aさん）の事例から【長期にかかわる支援について】インタビューを行いました。児童期については高木理事（発達支援部会長）、成人期については移行期当時の成人事業所職員、現在の職員にご協力をいただきました。

児童期での支援について

Aさんは、高校卒業まで療育部門の事業所を利用されており、多動と過敏が強いお子さんでした。当初はコミュニケーションをとることが難しく“うわばきを履けない”ということが印象的でした。幼児期は親子登園をしており、小学校に入ってから個別指導をおこなっていました。

嫌なことがあればパニックになり、“どうしたら本人が意思表示できるか？”と当時は模索していました。直接行動はおこなえる場面もあったため、写真で意思表示ができることを次のステップとして考えました。例えば牛乳を飲みたい場面



法人で最初の療育事業所

では、本人が牛乳を直接取るではなく、牛乳の写真（カード）を取って渡すことを覚えていきました。このカードによるコミュニケーションを増やすことによって、本人の意思表示を受け取ることができるようになってきました。それは同時に、本人は写真が何を意味するのか分かってきたということでした。このことで予定をスケジュールに落とし込み、先の見通しが持てるようになったことでパニックが減りました。

また、学齢期は学校との連携がとても大事でした。学校でもカードを使って予定を確認したり自分の意思を伝えたりすることで落ち着いて過ごせる場面が増えました。

中学校に入って学校に行きたがらなくなることがありましたが、要因を探ると、今まで使用していたスケジュールボードの引き継ぎがされていないことが分かりました。改めてスケジュールボードが大事であることを認識し、再度使用することでパニックも無くなりました。

また、本人が家を飛び出した時に、地域との繋がりの大事さを感じました。地域に“本人を知っておいてもらう”という取り組みも大切な支援なのかもしれません。

高等部を卒業して成人の施設に進んだ後も、そこで課題が現れれば、療育で関わった職員が成人事業所のカンファレンスに参加して一緒に考える機会があります。同じ法人の事業所ならではのメリットかもしれません。

本人が“わかる”“いやだと言える”ことが大事で、その環境をいかに作っていくかが大切と考えていると最後に高木理事は締めくくられていました。

移行期の支援について

高等部在籍中に次の進路として、同法人内の多機能事業所の利用はどうかとの話があがりました。自閉症に特化した事業所であること、家から通所可能な場所であることが主な理由です。利用前実習をおこなうにあたって、「予定を示すツール」として写真を準備しました。作業する場所やご飯を食べる場所、「家に帰る」という予定はお母様の写真を取らせていただきスケジュールカードにしました。実習を経て多少の不安はあったものの、ご本人が活動や作業を頑張ったこと、利用の希望をいただいたことで卒業後の施設利用となりました。

成人期の支援について

卒業後から変わらず当施設を利用いただいています。現在は 10 年目となりました。施設での過ごし方のリズムができ、お会いした当初から今も変わらず落ち着いて過ごせているように感じます。

当施設は自閉症の方に特化した施設です。TEACCH Autism Program*1 という考えのもと、自閉症の方が穏やかに過ごせるような環境設定を多く取り入れています。

*1 TEACCH Autism Program とは、米ノースカロライナ州で 1972 年以来行われている ASD（自閉スペクトラム症）の当事者とその家族を対象とした生涯支援プログラム

当施設の目標ですが「①力を発揮できる環境をつくる」「②自分で分かる、自分でできるような支援」「③意味のある活動、ニーズに合った活動の提供」を目標としています。そのために、日々の過ごし方の一つに「自分で始めて、自分で終わらせる」自立課題の設定をしています。自分ひとりでできる体験を通じて自己肯定感をもっていただくためです。自立課題はさまざまな種類があり、利用者さんの得意や興味を考えながら一人ひとりに合わせたものを提供しています。



A さんが実際に行っている自立課題の例
マッチング（モチーフや色をあわせる）が得意！



1 日の予定も今は絵カードで示すことで、
見通しをもって生活できています。

A さんは施設利用を始めた移行期 1 ～ 2 か月は不安な様子が多かった、という記録をみたことがあります。が、だんだんと落ち着いたそうです。環境の変化が苦手な利用者さんは多いですが、大きな拒否や長期の不穏にならなかったのは療育部門からの情報がしっかりと引き継がれていたこと、ご家族からの引き継ぎ、そして支援の土台に「TEACCH Autism Program」が継続的にあったからだと思います。また、日課やスケジュールは絵カードで伝えるなど、児童期からのコミュニケーション方法は今も日常的に使っています。児童期の支援は現在も A さんの支援に活かされていると感じますね。

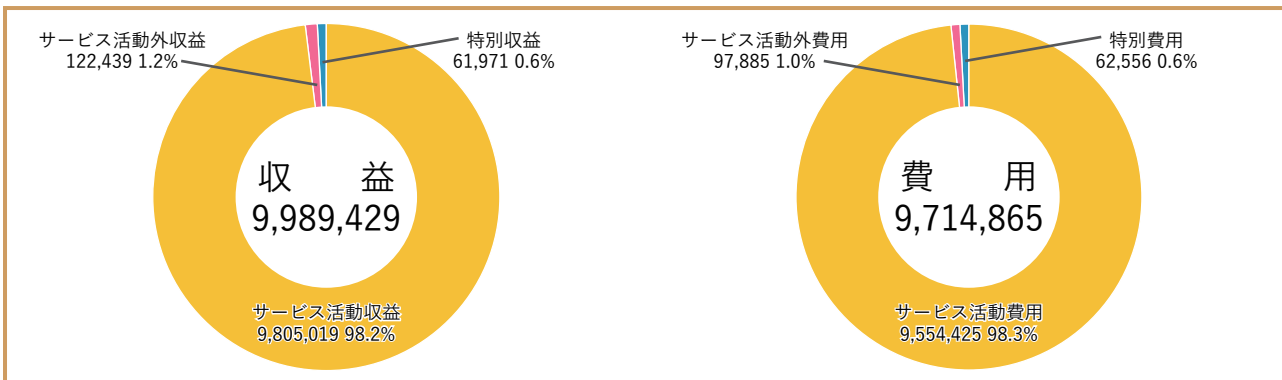
話を伺った職員からは高木理事と同様に「本人にとって必要なコミュニケーションが円滑に取れることが支援の目標ですね」と話されていました。取材中に A さんの声をきいて「今はご機嫌な声ですね」と穏やかな表情をされていたのが印象的でした。

（取材・執筆：広報委員 安達・加藤）

2024 年度（令和 6 年度）社会福祉法人県央福祉会事業活動計算書 〔令和 6 年 4 月 1 日～令和 7 年 3 月 31 日〕

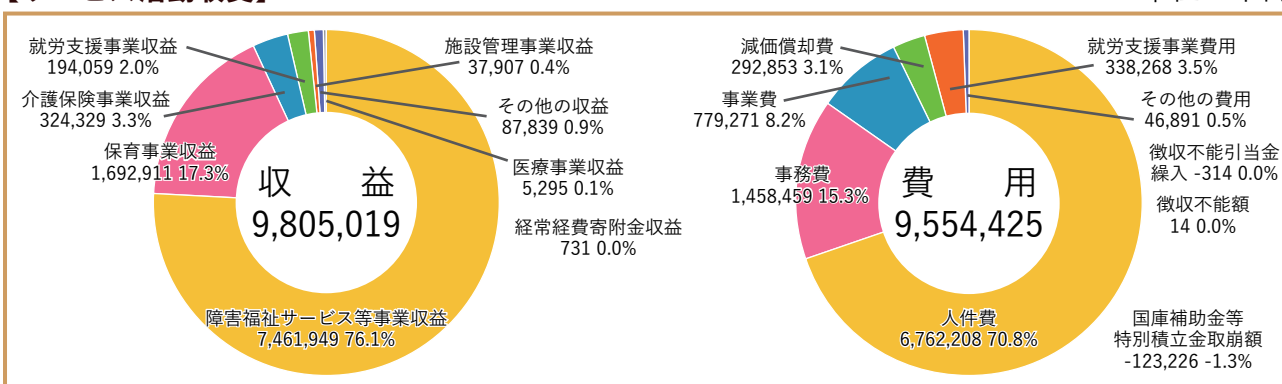
【全体】

単位：千円



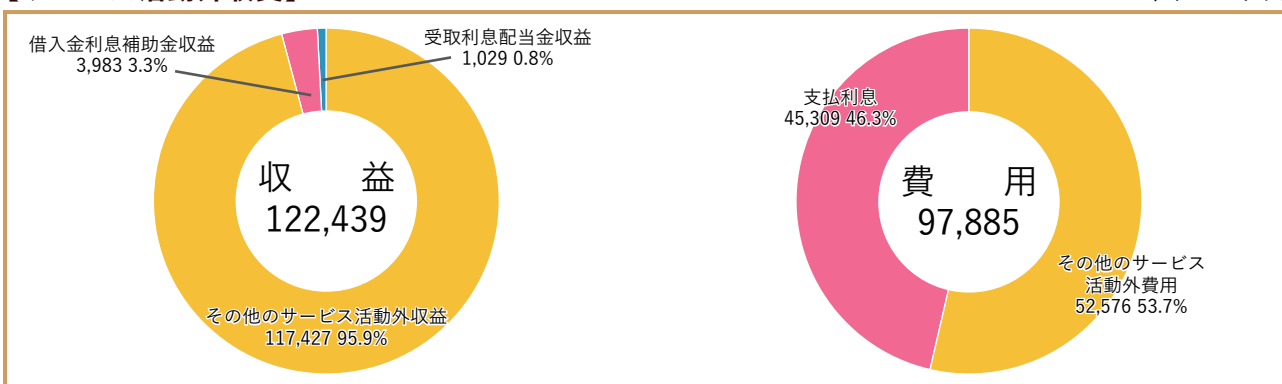
【サービス活動収支】

単位：千円



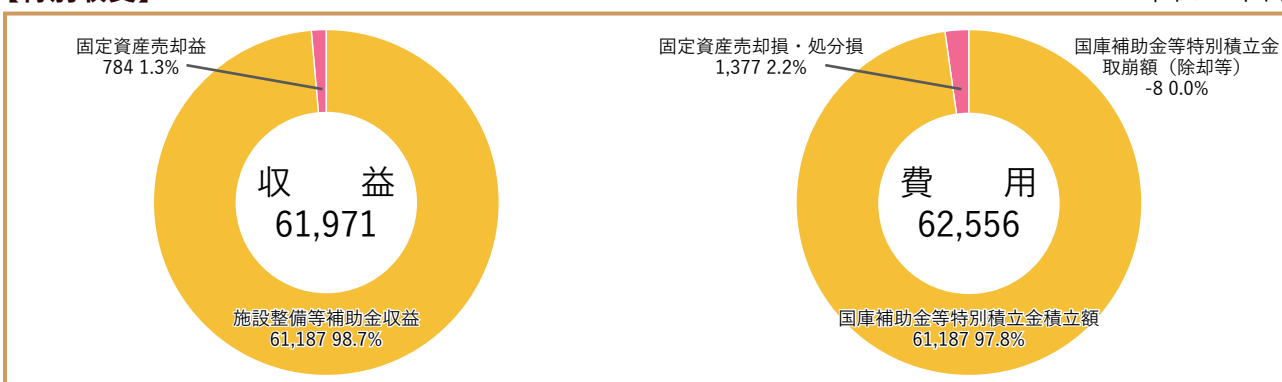
【サービス活動外収支】

単位：千円



【特別収支】

単位：千円

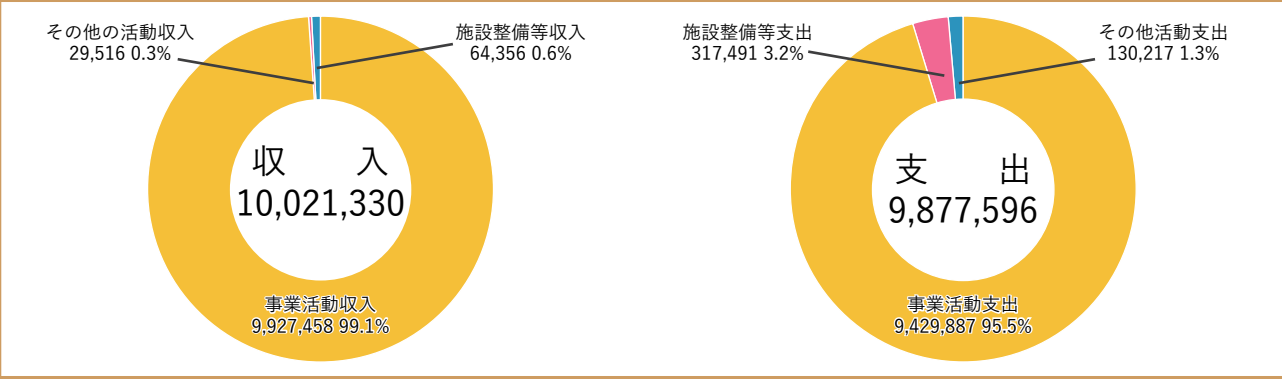


2024 年度（令和 6 年度）社会福祉法人県央福社会資金収支計算書

[令和 6 年 4 月 1 日～令和 7 年 3 月 31 日]

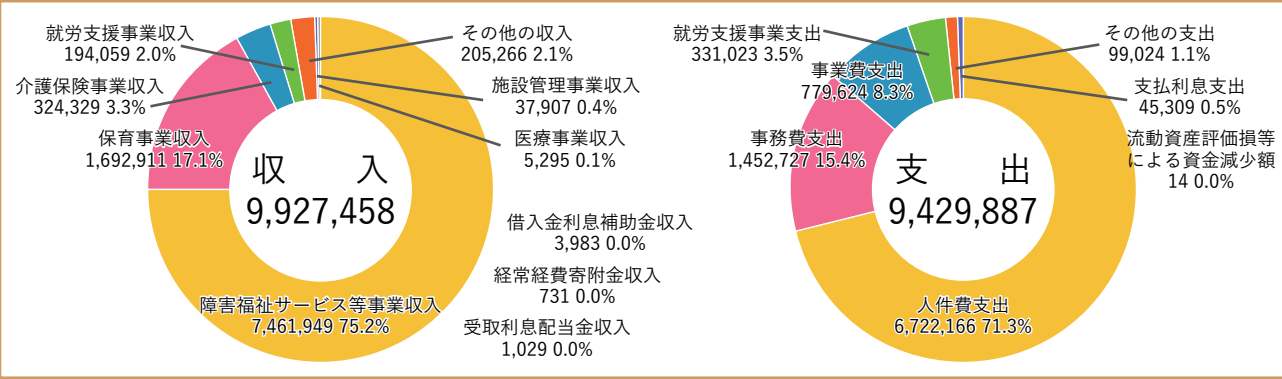
【全体】

単位：千円



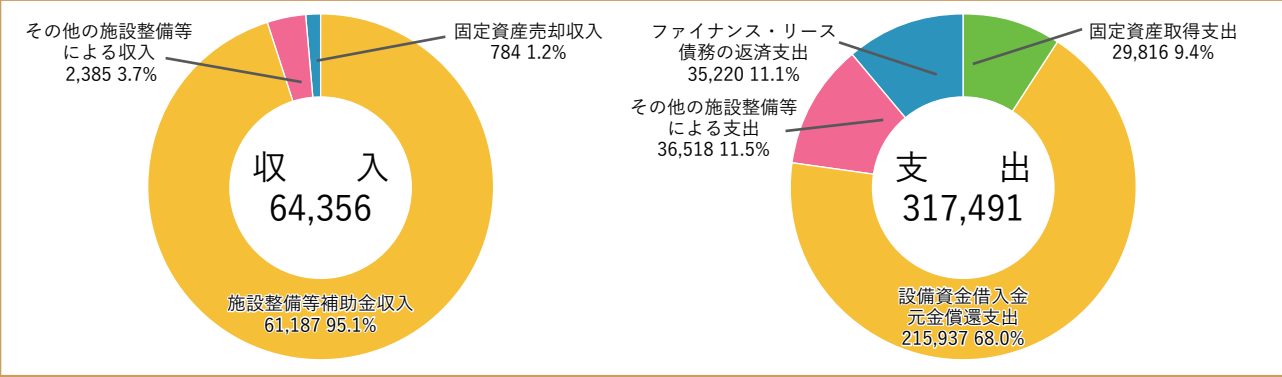
【事業活動収支】

単位：千円



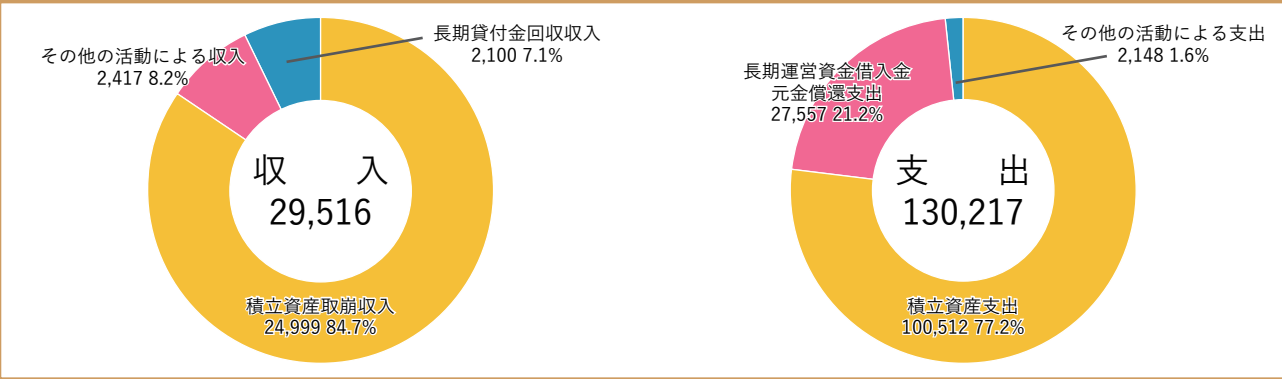
【施設整備等収支】

単位：千円



【その他の活動収支】

単位：千円



2024 年度助成金受給

ブックカフェひばりが丘（座間市）



助成金目：車両
ホンダ N-BOX

ブックカフェひばりが丘は、車両（ホンダ N-BOX）の購入に際して、2024 年度共同募金の配分の決定を受けました。送迎、納品、外出等で積極的に活用させていただきたいと思っています。ありがとうございました。

2025 年度物品寄贈

ふきのとう舎（大和市）

ふきのとう舎では長年、県央中地域のメーデー（海老名市・東柏ヶ谷近隣公園）の式典に参加させていただいており、



2025 年は珈琲を販売してきました。その中で「自動車総全いすゞ労連」様より毎年福祉施設へ物品寄贈を行っており、ふきのとう舎に声を掛けていただきました。ちょうど、古いエアコンが 2 台ありましたので、今回は新しいエアコンを寄贈していただきました。相談室と利用者さんの静養室に設置しました。ありがとうございました。

法人ホームページリニューアル

県央福祉会のホームページがリニューアル！

10 月に法人ホームページをリニューアルしました。約 7 年ぶりとなります。今回のリニューアルコンセプトは、若い職員のセンスを発揮した“キレイで見やすい”ホームページです。前年 11 月に作成プロジェクトが始動し、半年以上かけて何度も話し合いと修正を重ねてきました。その甲斐あって明るく見やすいホームページになったと自負しています。特に力を入れたのは事業所検索です。今後、事業所ごとに魅力ある写真を複数枚掲載していく予定ですのでぜひ検索してみてください！（ホームページ委員会委員長 猪瀬）



県央福祉会ホームページ
QR コード

編集後記

ポッコリお腹が気になって久しい。普段はデスクワーク中心で、運動不足になりがち。通勤駅での階段利用に加えて、自宅にエアロバイクを導入。毎日に乗れていませんが、2026 年こそメタボの解消に努めたいです。（青木）

編集委員

ふきのとう舎 小林
法人本部 青木
法人本部 守家

かたくりの里 工藤
障害者自立生活アシスタント 安達

あさみどり保育園 吉田
ライム 加藤
百合丘就労援助センター 鈴木